

提 言

子どもたちから学んだ大切なこと

本間一正（日本小児保健協会 名誉会員）

この度、思いがけず日本小児保健協会から「名誉会員」に推戴いただき誠に光栄に思っております。またありがたく感謝申し上げます。

私は、新潟大学小児科学教室から、教授の命で1年間の約束で富山へまいりましたが、諸般の事情でそのまま富山に住み着くことになりました。4人の子どもに、めぐまれて、男児は2人医師になりましたが、孫はおりません。

こちらへ赴任した翌年の5月に「不登校」の中学2年生の女子生徒が祖母と2人で来院されました。「無理やり学校へ行かせられるので、家にいたくないので入院させてほしい」と本人が訴えられました。短期間ならいいかなと思って医長の了解を得て入院させました。とてもやさしい生徒で、小さい子の面倒をよく見るし、看護師さんのお手伝いも進んでするのですが、「家には絶対に帰りたくない」とかたくなに言い張ります。長期に入院させるわけにもいかず、困り果てたところ、「先生の家なら行ってもいい」と言い出しました。まさかの事態に、家内に事情を話したところ「いいでしょう」と、あっさり言ってくれました。我が家には誕生間もない長男がいましたが、お手伝いや、子守りも嫌がらずにしていました。2週間ほどしたときに「勉強を教えてほしい」と、言い出しました。よくできる子でスムーズに学習は進みましたが「家へは帰りたくない」、「夏休みの宿題を全部やったら先生の家からなら学校に行ける」というもので、保護者の同意も得て、夏休み明けから校区外なので、家内が送迎して半年近く無欠席で登校しました。次年度の4月によりやうく自宅へ帰ることができました。現在は結婚されて子どもさんも2人元気に育てられました。「先生、うちの子は学校へ行っているよ」と嬉しそうに言っていました。



この経験は決して一般化できるものではありませんが、小児科医として、「子どもの心の声を聴く」ことを学ばせてもらった貴重な体験でした。結局この体験が私の小児科医としての方向性を決めてくれたようなものでした。

以後、少しばかり勉強して、病院とも交渉して「思春期外来」を開設することになりました。以来、不登校（当時は「登校拒否」と表現しましたが）の症例が開業の先生方からも紹介されてくるようになり、学校や、教育委員会との連携についても多くの困難に遭遇しながら、少しずつ少しずつ前へ進めたかなと思っています。

現在の不登校児の多くは「発達障害」が関係していますが、当時は必ずしもそうではなかったように思います。不登校だった子どもさんから、結婚の報告を聞くのが何よりうれしいことで、二組ほどは私を招待してくれました。小児科医が「どこまでやればいいのか」、いつも悩むところですが、頼ってくれる子どもたちに「しっかり向き合う」という姿勢の重要性だけはこの児たちから学ばせてもらったと思っています。いましばらく現役を続けて、何とか次の人たちにスムーズにバトンタッチをしたいと思っているこの頃です。